# 大平正芳記念財団レポート

# 第34回「大平正芳記念賞」·第32回「学術研究助成費」 贈 呈 式

平成30年6月12日(火)、財団合同役員会のあと正午から、300名の参会者のなか「第34回大平正芳記念賞」「第32回環太平洋学術研究助成費」の贈呈式が東京・一ツ橋の如水会館2階大ホールと中ホールで行われました。



受賞者の皆さんと大平知範理事長 (前列中央)

贈呈式ははじめに、大平知範理事長より財団の活動と平成30年度の各授賞者の紹介がありました。次に末廣昭・運営選定委員長より選考の過程の説明と選評があり、「大平正芳記念賞」をミレイヤ・ソリス氏(ブルッキングス研究所外交政策プログラム上級研究員)ほか6名の方に贈りました。続いて授賞者を代表してミレイヤ・ソリス氏が謝辞を述べられました。その後、拓殖大学前総長の渡辺利夫先生の挨拶と乾杯のあとパーティに移り、各授賞者を交えて歓談に入り、盛況裡に午後2時過ぎお開きとなりました。

2018 (平成 30) 年 9月発行

# 贈呈式より



大平知範理事長の挨拶

本日は、皆様には大変お忙しいところ、また蒸し暑い中、如 水会館にお越しいただき有難うございました。厚く御礼申 し上げます。

私も理事長職を拝命し、二年目を迎えることができました。お陰様で本財団も設立35年目を迎え、昨年度は定例の事業に加え、8月には記念館に当時の外務大臣の岸田文雄様をお迎えしました。9月には北京での日中国交正常化45周年式典に参加しました。続く11月には記念館オープン1周年に合わせ、今後の運営管理のための委員会を観音寺市長以下のご出席をいただき発足させていただきました。

本日の贈呈式・レセプション開催にあたり、父である前理 事長は懸念しておりました。というのは財団の世代交代は もちろんでありますが、大平正芳を知る方々も高齢化し、本 日の出席者数も著しく減るのではないかという心配でござ います。然しながら、お陰様と申しますか300名のご参加を いただき、昨年並みの盛会となりました。私共も今後も努力 を重ね、魅力ある内容をもった財団にしなければと思ってお ります。 2018年6月12日に行われた贈呈式でのスピーチ及び各受賞者から寄せられた謝辞を掲載します

そのような意味から、本年度から祖父の遺しました『硯滴』 を趣向を変え改めて、世に出させていただくことにいたしま した。

『視滴』と申しますのは、祖父が議員になりました昭和四十四年頃より新聞・雑誌への寄稿文、講演の際の速記録の類のものでありますが、その中から捨てがたく皆々様に改めてみていただきたい作品を、年に2~3冊ご紹介してまいりたいと、新しく『視滴考』として第一巻目を発行させていただきました。ただ、今後は祖父本人のものだけではなく、ゆかりのある方々の書かれた作品、エッセイなども紹介していく予定ですので、ご期待いただけたらと存じます。

また、本日のゲストスピーカーとして拓殖大学の前総長であられた渡辺利夫先生にお願いしております。

渡辺利夫先生は大平正芳記念賞の第3回の授賞者であり、 一昨年までこの賞の運営・選定委員長を務められておりました。今、米朝会談が注目される中、外交は軍事と通商がからみ 複雑な様相をみせております。そんな朝鮮半島・東アジア情 勢などをお話ししていただければ、と思っております。

本日は、6名の先生方が、第34回大平正芳記念賞を受賞されます。先生方のこれまでの長年にわたる研鑽に対し、心より敬意を表させていただきますと共にお喜び申し上げます。その受賞者の中で、ミレイヤ・ソリス先生は祖父大平正芳が亡くなる年、メキシコを公式訪問しました際、日墨学院の歓迎式で、三十八年前に歓迎のスピーチを披露していただいた女子生徒であられました。

本日は、粗酒・粗こう、万事行き届きませんが、お時間の許す限り、お食事・ご歓談をいただきますようお願いして、ご 挨拶とさせていただきます。

有難うございました。



末廣昭運営・選定委員長の選評

まず、受賞者の6名のみなさん、受賞おめでとうございます。

最初に、運営・選定委員会の委員7名の紹介をさせていただきます。

青山和佳先生。東京大学教授で、文化人類学、宗教社会学が 専門。フィリピン・ミンダナオがフィールドで、運営・選定 委員会では東南アジアの社会を担当されています。

金子芳樹先生。獨協大学教授で、国際政治、東南アジア政治が専門。マレーシアがフィールドです。

川島真先生。東京大学教授で、アジア政治外交史、中国が専門。アジア太平洋の政治・外交の歴史を担当されています。

木村福成先生。慶應義塾大学教授で、国際経済学・貿易論が専門。アジア太平洋の経済・貿易を担当されています。

久保文明先生。東京大学教授で、現代アメリカ政治が専門。 アジア太平洋政治を担当されています。

黒崎卓先生。一橋大学教授で、開発経済学が専門。南アジアがフィールで、開発経済学関係と南アジアの経済を担当されています。

最後に私、末廣昭。学習院大学教授で、タイがフィールド。

東南アジア経済を担当しております。

2016年度にメンバーの総入れ替えを実施、平均年齢が13歳 くらい若返りました。今回、第34回は、新しいメンバーによる 選考で、2年目となります。

2017年度は全部で44冊の本が、他薦、自薦により事務局に寄せられました。昨年10月から今年の1月まで計4回の運営・選定委員会での議論の結果、お手もとの『平成30年度大平正芳記念財団の事業』に示したとおり、計6名の方の授賞を決定しました。通常は3名、多くても4名が受賞者でありますが、今回は大変豊作の年にあたり、研究助成にこれといった案件がなかったため、「環太平洋学術研究助成費」の分も動員して、合計6名の方を選んでおります。それでもなお、候補作が何冊か残っておりまして、2018年度「繰り越し」という形で、5冊の本がスタンバイしています。今年度の選定委員会は10月から開催いたします。

それでは、6名の方の授賞理由を簡単に紹介させていただきます。

Mireya Solis さん「Dilemmas of a Trading Nation: Japan and the United States in the Evolving Asia-Pacific Order」

日本と米国という「通商国家」をとりあげ、まさに現在のホットイッシューであるアジア太平洋の通商政策がどのように決定されてきたのかを、経済的な競争力の向上、政治的な指導力の発揮、社会的な正当性の確保、そして政治面での実現可能性の見込みという、それぞれの政策目標と照らしながら検討した作品です。通商政策は、一方で既得権益者の利益に切り込まないと野心的な通商秩序の構築は不可能ですが、かといって、逆にそれを実行すれば激しい政治的抵抗にあうことは避けられません。この両者のぶつかり合いと調整の過程を、日米両国の通商政策の決定過程に光を当てながら実証的かつ理論的に解明した研究が、ソリスさんの本でありまして、6名のなかでも「大平正芳記念賞」の趣旨にもっとも合致した作品であると思いました。

次は、宝剣久俊さんの『産業化する中国農業―食料問題からアグリビジネスへ』と題する本です。

中国の目覚しい経済発展を支えてきた要因のひとつは、農業の発展にあると考えます。そのプロセスを長期間にわたる現地での調査と膨大な量の統計データを駆使して明らかにした作品がこの本です。宝剣さんは、2つの農業問題をまず提示します。一つ目は、発展途上国が直面する農業問題、つまり人口増加のもとで食料需要が増加し、そのことが食料価格の上昇、そして、賃金の引き上げを招いて工業化の足をひっぱるという問題です。もう一つ目は、先進国が直面する農業調整問題で、人口成長率が逆に低下し、食料需要の飽和の結果、過剰生産と農家所得の低下に直面するという問題です。中国は、じつはこの発展途上国と先進国がそれぞれ経験する農業問題にすでに直面し、そうした問題に中国がどう対応したのかを明らかにしたのが宝剣さんの研究です。

本書の最大の特徴は、中国語を使って現地で農民や農村幹部とインタビューする、現場感覚にあふれた地域研究の成果と、計量的手法を駆使する開発経済学にもとづく分析のみごとな結合で、近年にない水準の高い中国研究の成果であると評価しました。

三番目は、宮田智之さんの『アメリカ政治とシンクタンク 一政治運動としての政策研究機関』です。

この本は、アメリカの政治の中ではきわめて重要な位置を 占めながらも、確立された分析方法がないという問題と、公 開されたデータの制約から、これまでほとんど研究が進んで こなかった「アメリカのシンクタンク」の実態に迫った、パイ オニア的な研究であります。アメリカでは、それまで政策研 究と政策提言にとどまっていたシンクタンクが、1970年代以 降、政治運動により直接コミットするようになりました。そ のプロセスを保守系シンクタンクの役割に焦点をあてつつ、 短期的な影響力、中期的な影響力、長期的な影響力の3つに分 けて検討しています。また、数々のエピソードを交えた宮田 さんの活き活きとした記述は、アメリカのシンクタンクの具 体的な活動をほうふつとさせ、読者を飽きさせません。

日本を含め東アジアにおいても、今後、強力なシンクタン クの育成が重要な課題となっており、その意味で、本書の刊 行の意義はとても大きいと考えました。

四番目は、貞好康志さんの『華人のインドネシア現代史― はるかな国民統合への道』です。

貞好さんの研究は、外国人移民の問題、あるいは多文化共 生の問題が日本や世界にとって大きな共通課題になってい る今日にとって、きわめて示唆に富む本です。貞好さんは、イ ンドネシアを事例にとりながら、ほぼ100年間という長い歴 史のなかで、そこに住む華人たちが、「国民統合」というプロ セスのもと、どのように対応していったのかを、丁寧に跡付 けました。この本のエッセンスは、華人の置かれた実態だけ ではなく、とくに知識人の思想や言説の内容にまで踏み込ん で、彼らの心の葛藤を描いている点にあります。貞好さんの 指導教官は京都大学東南アジア研究所の土屋健治先生で、土 屋先生は、1985年第1回大平正芳記念賞の受賞者であり、その 後、記念賞の選定委員を務められました。土屋先生は、惜しく も1996年に亡くなられましたが、彼の「東南アジア知識人論」 を受け継ぐ貞好さんが、30年近いご自身の研究蓄積の成果を 運身の力を込めて刊行し、そのことが認められたことを私た<br /> ちは嬉しく思います。それと同時に、もし土屋先生が生きて おられれば、誰よりも今回の授賞を喜ばれたことと思いま す。

五番目は、鎌田由美子さんの『絨毯が結ぶ世界―京都祇園 祭インド絨毯への道』です。

この本を最初に評価したのは、開発経済学の観点から南アジアを研究している黒崎さんでした。「とにかくすごい本だ」という一言です。黒崎さんが諸手を挙げて評価をするのはあまり聞いたことがないので、私もすぐ読みましたが、600頁を超える大著でありながら、一気に読み、圧倒されました。

出版時の本の帯のうたい文句は「美のグローバル・ヒストリー」です。絨毯を素材に、その織り方や網目の問題などの

技術的側面、インドや中東における絨毯の産地の歴史、ヨーロッパや日本へと伝播する流通の話、そして、京都祇園祭りのだし・「やまぼこ」に使用されている絨毯が、従来言われてきた北インドではなく、南インドで生産されたことを実証するまでの記述は、「博覧強記」という表現がぴったりの展開です。何より、188点のカラー図版と167点の白黒の挿絵図は圧巻であります。これを収集し、その掲載許可をとりつけ、それぞれについて、絵画史のコメントをつけた鎌田さんの努力はもちろんのこと、これに協力した名古屋大学出版会の編集者の作業にも、心より敬意を表します。

最後は、高木佑輔さんの『Central Banking as State Building: Policymakers and Their Nationalism in the Philippines, 1933-1964』です。

私自身、40年間タイ研究を続けてきた研究者の立場から言いますと、第二次大戦以前の東南アジアの植民地支配に対する抵抗運動やその後の独立、そして1970年代以降の東南アジアの開発志向的な政治経済の動きは、日本ではかなり研究が進んでいると考えます。ところが、東南アジア諸国が政治的な独立を果たし、経済政策の面では「経済ナショナリズムの時代」と呼ばれる、1950年代から1960年代前半までの動きは、じつは研究上の空白となっています。

高木さんの研究は、この空白を埋めたことと、従来のフィリピン政治論、つまり、地方のボスが中央の議会を牛耳る「オリガルキー政治」といった評価や、統治の制度が整備されない「弱い国家論」を批判的に検討し、1930年代から1960年代半ばまでの中央銀行の動きと、その「中立性」を求める経済テクノクラートと政治指導者の間の緊張関係をビビッドに描きだしました。高木さんが主張する政治体制をめぐる思想の闘い、いわゆる「理念(イデア)の政治」に関する研究は、今後の東南アジア政治研究の方向性を示唆していると思います。

以上、6名の方の今回の授賞を心からお喜びすると同時に、 今後ますますのご活躍を期待いたします。



渡辺利夫先生の挨拶と乾杯

ご紹介頂きました渡辺利夫です。受賞された6名の方々 には心からの祝意を申し上げます。

しばらく前に、今日の記念パーティで、風雲急を告げる朝鮮半島情勢について何かを話せというご依頼を、財団の事務局から賜りましたが、まさか米朝首脳会談の当日に、このお話をする羽目になるとは予想もしておりませんでした。ご要望に応えられる話ができるとは思えませんが、とにかく話を始めさせて頂きます。

南北を含む朝鮮には、国家間の合意やら協定やら条約やらを軽視し、時にこれを覆して恬然たるところがあります。

北朝鮮は、1994年に米朝枠組合意を呑んだのですが、核開発を継続、また2005年には北朝鮮を含む6者協議により、核放棄のための共同声明が採択されたものの、その1年後に核実験を敢行したという次第です。一事が万事であります。

日米は、北朝鮮の CVID、つまり「完全かつ検証可能で不可 逆的な非核化」を要求しております。

しかし、北朝鮮が自らの生存を保証する唯一の手段である

核ミサイルを放棄することなどありえない、と私は考えます。今日の米朝会談で、CVID、もしくそれに近い合意がなされ、この合意が文章化されるかもしれませんが、いずれかの時点で北朝鮮はこれをひっくり返す可能性は十分にあります。経験則からいえば、むしろその方があり得るシナリオだというべきであります。

国際的な合意、協定、条約を、しばしば平然と破るという点においては、韓国も同様です。2015年末の慰安婦問題に関する日韓合意は、これをもって「最終的かつ不可逆的に解決」したという、外交においてはこれ以上もない表現をもって決着しました。

しかし、問題は何も解決しておりません。日本は合意に誠実に対応して、韓国の設立した財団に10億円を拠出いたしました。そしてその多くが元慰安婦の手に渡ったものの、大使館前の少女像一つ撤去できないでおります。

「最終的かつ不可逆的に」といいますと、すぐに思い起こされることがあります。日韓の国交が樹立したのは、1965年の日韓基本条約ならびに同時に締結された「日韓請求権・経済協力協定」によってであります。

そこには、両国間の賠償請求権は「完全かつ最終的に解決された」と書き込まれました。韓国側から再交渉などいい出されないようにという、日本側の強い懸念を込めての表現であったに違いありません。しかし、やはり慰安婦問題や徴用工問題等での、憲法裁判所の判決を含む執拗な反日攻勢がやみません。

ここに福澤諭吉が『時事新報』に書いた一つの文章があります。『時事新報』というのは、福澤が明治15年に発刊した日刊紙で、その社説を書いていたのはもちろん福澤自身です。

この時事新報の社説の中で、朝鮮問題は圧倒的に頻度の高いテーマでした。朝鮮問題が福澤後半生の最大のテーマでありつづけたからです。この新聞の明治30年10月7日付けの文章にこうあります。原文ですと聞きにくかろうと思いま

すので、私の拙い現代語訳で聴いてください。

「朝鮮人は、身分の高い者から低い者まですべてがみせかけだけの君子、つまり偽君子であり、誰ひとりとして信頼できる者がいない。このことは私の長年の経験に照らしても明白である。したがって、このような国民とはどんな約束を結んでも、背信と違約が彼らの本性であるから、これを意に介する必要はまったくない。すでにこれまでの外交においてもしばしば経験ずみのことであり、朝鮮人相手の約束ならば、はなから無効のものだと覚悟して、自らの実利を得るより他に方法はない」

この文章がいかなる背景から出てきたものか、といいますと、次のような次第であります。日清戦争の勃発前、時の外務大臣・陸奥宗光は朝鮮政府に「朝鮮内政改革提案」を提起しました。これに朝鮮政府が応じ、親日派で、福澤諭吉の強い思想的影響下にあった、金弘集を首班とする内閣が組成され、そうして改革に打って出ようとしました。「甲午改革」と呼ばれています。この改革は、国政事務と宮中事務の分離、科挙の廃止、身分差別の撤廃、そういったことを目指した改革であります。

しかし、日清戦争の直後、ロシアが独仏を巻き込んでの三国干渉により、日本は遼東半島の清国還付の屈辱に甘んじざるを得ませんでした。朝鮮はこの日本を「恃むに足らず」とみて、半島に新しく勢力を張るロシアに急接、改革は頓挫してしまいます。金弘集は親露派の民衆によって光化門前で撲殺されたというのです。

先の福澤の文章は、後半生を朝鮮の近代化にかけた福澤の 失意の、絶望の論説であります。

朝鮮の伝統は「事大主義」です。事大というのは、大きいものに事えるということです。朝鮮は、かつては中国に圧倒的に事大し、次いでロシアに事大し、日本に事大し、といった具合に、事大の対象を次々と変化させてきました。

それでは、現在の韓国がどこに事大しているかといえば、 北朝鮮だといえば皆さんは驚くに違いありませんが、私は最 近そう考えるようになりました。どうしてなのでしょうか。

韓国民の多くは、大韓民国という国家の正統性に何か胡乱なものを感じているのではないかというのが私の推量です。

大韓民国は、自力で独立した国家ではありません。第二次 大戦における日本の敗北によって思いがけずも転がり込ん できた独立です。ここにはインドの対英独立闘争とかイン ドネシアの対蘭独立戦争といった美しい建国の物語があり ません。

対照的に北朝鮮はどうかといえば、嘘話にはちがいないのですが、金日成という人物が満州で抗日パルチザン闘争を指揮、日本軍に果敢に立ち向かって、日本敗戦の後に半島に凱旋、権威と権力において並ぶものなき建国者となったという物語があります。

そんな嘘話どうして信じるのと私は思うのですが、自国の建国のありように、どうにもしっくりした気分をもてない韓国民は、建国の正統性は韓国にではなく北朝鮮にあるという「センチメントの罠」にはまりやすいのであろうと、私は考えています。

金日成による「主体思想」なるものが北朝鮮の「唯一思想」だとされています。韓国にもこれに同調する左派系の、しばしば「主体思想派」略して「主思派」と呼ばれる人々が、少なくありません。文在寅大統領さえ主思派への傾きは強いと私はみています。

西岡力さんの論文によりますと、青瓦台の大統領秘書室の 秘書官以上の幹部31人中、何と15人が主思派の活動家歴、地 下革命運動家の経歴をもつ人物だというのです。北朝鮮に よる対南工作は実に容易であります。

対南工作阻止の司令塔は、かつては韓国中央情報部つまり KCIAと呼ばれていましたが、その後継が「韓国国家情報院」 です。この「国情院」の解体が文政権の視野の中に入ってい る、というかなり確度の高い情報があります。韓国が北朝鮮 に対して「自ら家を解く」、そういう時期が近づいている、と 考えざるを得ません。

北朝鮮の思う壺ですが、もしそうなれば、中国の勢力が朝 鮮半島に迫り出してくる可能性を開くことに、必ずやなりま しょう。

韓国が無力化され、さらに中国がこの中に割り込んでくる 事態となれば、日清戦争開戦前夜の極東アジア地政学の再現 であります。日清戦争とは、清国に事大していた李氏朝鮮が、 政争や内乱のたびに大量の清国兵の派兵を要請して、これが 海峡一つ隔てた日本に不安と恐怖を誘発して勃発した戦争 でした。

先だって韓国を旅行しまして、旧知の保守派の重鎮の何人かから、現在の韓国危機の内実をうかがってきました。彼等が一様にいうのには、韓国には「デモや集会や結社の自由」は ふんだんにあるけれども、言論の自由、とりわけ対北朝鮮、対 日関係の言論には自由がきわだって少ない、何か政権の意に 反する言説を吐けば、すぐに名誉毀損や損害賠償の対象になるとの懸念を聞かされました。

司法では原告勝利が原則となっているとも聞かされました。韓国はもはや自由民主主義の国とはいえないと嘆息する彼らの姿を見て、暗然たる気分で帰国したのであります。 ご清聴、有難うございました。

# 大平正芳記念財団 — 合同役員会

(如水会館)



大平知範理事長の報告



合同役員会で「第34回大平正芳記念賞」の授賞者の皆さんが 紹介されました

#### ●運営・選定委員

委員長・末廣昭

委員·青山和佳/金子芳樹/川島真/ 木村福成/久保文明/黒崎卓

# 受賞者謝辞

# 〔大平正芳記念賞〕



#### 受賞作

**"DILEMMAS OF A TRADING NATION:**Japan and the United States in the Evolving Asia-Pacific Order."

Mireya Solis

(ブルッキングス研究所外交政策プログラム上級研究員)

大平知範理事長、大平正芳記念財団理事の皆様、ご来席の 皆々様

ミレヤンリスと申します。

ワシントン DC にあるブルッキングス研究所のフィリップ・ナイト日本研究チェアであり、東アジア政策研究センター共同所長でもあります。

本日、第34回大平正芳記念賞の受賞を祝う、この特別な場で、皆様方にお話しできることを光栄に存じます。この賞は30年以上にわたり、環太平洋連帯構想に関する優れた学術研究を認め、支援してきました。私の著書、Dilemmas of a Trading Nation: Japan and the United States in the

Evolving Asia-Pacific Order (貿易国のジレンマ:アジアー太平洋圏の発展における日本と米国)が、他の優れた学術研究と並んで今年の受賞に選ばれたことに恐縮しております。スピーチを始めるにあたり、受賞仲間の皆さんに敬意を表します。

第34回大平正芳記念賞の受賞者、皆様の仲間となれたことを光栄に存じます。

大平正芳記念賞は私にとって、知的にそして個人的に、非 常に特別な意味があります。知的な側面としては、私の本の テーマと大平首相が環太平洋連帯構想を推進するなかで遂 げられた先駆的な業績との間に深い繋がりを感じておりま す。皆様方がよくご存じの事ですが、大平首相はこの目的を 実現するための戦略を考え出すために環太平洋連帯研究グ ループを集めました。この研究グループは、1980年5月19日 に最終報告を大平首相に提出しました。この報告書は、広大 な太平洋を、多彩な国々が一生懸命に努力して一つの地域共 同体を築き上げていく場としての内海と見なす、という説得 力のある構想を打ち出していました。重要な点は、これは開 放的な地域主義 - 自由で開放的な相互依存の促進 - という 考えに基づいていて、どの国がこの共同体に属するかについ ての境界は緩めになっていました。目的は閉鎖的な地域ブ ロックを形成することではなく、地域連携を深めることでし た。そして賢明にも、貿易・投資・エネルギー供給、だけで はなく、文化交流も強化されるべき絆とされました。人と人 の交流、海外研究プログラム、教育などを通じて環太平洋連 帯の骨組みを強化することを強く主張しました。これは先 進的な見解であり、21世紀への青写真でした。

大平首相が提唱した環太平洋連帯構想は、混迷の時代に如何に対応すべきか、についての思慮深い見解でもありました。報告書には、第二次世界大戦から30年が経過し、自由で開放的な国際経済体制に衰えが見えてきたことに言及されました。この意図が使命の宣言として次の通りに書かれました。

「このような環境のもと、日本と他の太平洋諸国が、協調と相互依存関係を強化することにより、自由で開放的な経済体制を活気づけ、維持するために共に努力することを願うものである。」

第二次世界大戦から70数年が経ち、私たちは再び次の事柄に危惧を募らせています。多国間貿易が活性化されうるか、経済的な相互依存が引き続き促進されるか、太平洋が多彩な国々の繁栄の内海になりうるか、についてです。これが私の著書 Dilemmas of a Trading Nation の意図する関心事です。この著書では、環太平洋パートナーシップ貿易協定(略してTPP)の行方に焦点を合わせて幾つかの基本的な疑問への回答を追求しました。日本は自国の国内経済復興を促進するため、通商外交において更に前向きな役割を果たしうるか?米国と日本は、日米関係における貿易の役割を変えて、過去の摩擦を乗り越え、新たなる国際貿易のルール作りと環太平洋経済体制の構築に共に励むことができるだろうか?米国は国際主義の信義に立ち戻り、自由貿易制度を推進し続けることができるだろうか?

貿易政策は各国において、経済再生、社会結合、国際的な影響と言った国の将来をめぐる議論の最重要課題に躍りだすこととなりました。米国と日本が貿易国として、この先どのような道を描くのかが、今、最も重要な問題です。懸念されるのは、この両経済大国は国際経済ルールを改善していけるか、途上国がさらに高度な水準を目指し集中していくようなインセンチブを作り上げられるか、という能力です。結果はいくつかの要因にかかっています。戦後の安定の源であったルールに基づく国際秩序の再確認、アジアにおけるアメリカ外交の中核となる二国間同盟の強化、ライバル国と友好国に対して米国の勢力維持を再認識させる能力です。

通商政策の実行の場において、私たちは中国の台頭による 地政学的な変化の時機に国際的な主導権の試験を目の当た りにしています。しかし、国際的な主導権争いでの成否は、 これらの国が政治的な意思を集め、国内再生に投資する能力に掛かっています。私たちは急激な経済的な変化の中を突き進んでいます。テクノロジーとグローバル化が仕事の性格を変えつつあるので、そのため、開放経済を支えるには労働力開発、技術習得、社会流動性への投資が必要になるでしょう。海外で主導権を得るには、自国内での社会回復力が基礎となります。

米国の貿易協定からの撤退の後、TPPプロジェクトを救ったことによって、日本は危機の中で貿易主導権を果たしうることを世界に示しました。TPP11は画期的な自由化の目標と、ディジタル(インターネット)・エコノミーのような新しい分野をカバーするルールによって、保護主義への地滑りを防ぎ、米国の復帰を促す道筋を示しました。理由は、すぐに明らかになりますが、メキシコがこの新たなTPPを批准した最初の国となったことは、私を勇気づけてくれました。

大平正芳記念賞の受賞は、非常に個人的な旅で一回りして 戻ってきた感じがします。私はメキシコで生まれて育ちま したが、母が、私の人生を大いに変えた決定なのですが、妹と 私が英語だけではなく、新しい外国語も学ぶのが良いだろう と考え、メキシコシティーの新しい日本人学校「日墨学院」 Liceo Mexicano Japones に入学させました。1980年の春の 事ですが、私は中学生で、大平首相がメキシコに来て、私たち の学校を訪問すると聞いて、皆で興奮しました。私の学年の 生徒全員が、首相を歓迎する挨拶の文章を暗記するように言 われました。そして先生方はその中から首相への挨拶文を 述べるメキシコ人の生徒を一人選びました。その生徒代表 に選ばれて、1980年5月2日に大平首相をお迎えしたことは、 大変な幸運でした。(これは環太平洋連帯研究グループが最 終報告を提出したのと同じ月です。)

私が首相に何を語ったか、思い出せるのは「大平総理大臣」だけですが、運の良いことに、この行事についての新聞記事をとっておきました。皆さまお分かりの事と思いますが、14

歳でこんな機会を持ったことに興奮しており、この新聞記事を38年間、アルバムに挟み込んでおいたのです。大平記念賞 受賞の知らせを受け取ってから、私は記事を読み返し、再び 首相の言葉に感動を覚えました。これは大体の訳文ですが、 大平首相があの講堂で私たち、メキシコ人、日本人の生徒に 託したメッセージを掴んでいます。

「親愛なる子供たち、あなた方は将来両国の基盤となる人材です。一生懸命勉強し、優れた市民に成長してください。」 「あなた方にとって重要なことは、幅広い視野と柔軟な思考を獲得し、未来の国際コミュニティに貢献することです。その点で、リセオは、両国民の関係を近いものとするような絆を生み出すという重要な使命を担っています。」

今、この同じメッセージを、今度はスペイン語ですが、東京まで私と一緒にきた二人の娘に捧げたいと思います。(下の娘は、私が首相から聞いた時と全く同じ年齢なのです。)

# "Ustedes, queridos "Lo importante

国際社会に背を向ける国が増えるこの混迷な時に、柔軟な 思考と寛容な心の重要性について、また、人と人の交流を深 めることの大きな可能性について、次世代に向かって語るべ き、もっとも強力なメッセージはないと思います。メキシコ、 日本、そして米国を巡る旅の中で、この理想に生きる方々か ら並々ならぬ機会を与えていただきましたが、この方々が環 太平洋共同体での協力の原動力として、教育と文化交流を促 進してきたのです。

終わりに、家族への感謝の言葉を述べます。母は私の職業 の道筋を定めることになった日本研究の道に私を置いただ けではなく、可能な限り豊かな人生にしてくれました。20数 年来の友人、山口睦子さん(むっちゃん) は家族同然になりました。そして娘のナタリアとパオラに、これは、私の為すこと全て同様に、あなた方のためのものです。私が誰であるのかに、意味を加え、私が為すことに目標を与えてくれるのがあなた方だからです。

ご清聴ありがとうございました。

#### 受賞作

#### 『産業化する中国農業

#### 一食料問題からアグリビジネスへ』

ほうけん ひさとし 宝剣 久俊

(関西学院大学国際学部教授)

このたびは、名誉ある大平正芳記念賞を賜り、大変光栄に存じます。財団関係者の皆さま、運営・選定委員会の先生方、これまでの研究活動に多大なご支援を賜った指導教官の先生、同僚、友人、出版社の編集者など多くの方々に、心より感謝申し上げます。

ご存じのように、2018年は日中平和友好条約締結から40年 目の年で、中国の改革開放の40周年にもあたります。他方、 中国の改革開放がまず農村の経済改革から始まり、貿易・投 資の対外開放と都市の経済改革に広がっていたことは、意外 に知られていないかもしれません。人民公社のもとで低迷 していた農業部門を立て直し、農民の生産意欲を高めるた め、1970年代末に農業生産責任制が導入されました。農民自 身の積極性も相まって、この制度は瞬く間に全国に広がり、 1980年代前半には大幅な食糧増産を実現しました。

しかしながら、食糧の生産・流通に対する厳しい直接統制は継続され、農業の技術進歩も遅れたことから、1980年代後半から農業部門は相対的に低迷し、農村 - 都市間の経済格差は拡大し続けています。この状況を打開するため、1990年代に入ると「農業産業化」と呼ばれる農業・農村振興政策が提

起され、1990年代後半から本政策が全国的に展開されてきました。そのなかで、「龍頭企業」と「農民専業合作社」と総称されるアグリビジネスと農協的組織が中心となり、農地の集約化と農業経営の専門化、契約農業の普及と農産物の高付加価値化が進展し、農村社会・経済の様相も近年、大きな変貌を遂げています。拙著では、このような40年間にわたる「三つの農」をめぐる問題、すなわち農業・農村・農民の問題の変容を一次資料に基づき実証してきました。

拙著の執筆中には、中国の地理的な広大さと農業の多様性、農業事情の急速な変化に日々圧倒され、どのように取り組めば良いか常に迷い続けてきました。そのような時、先達の方々が残された優れた研究成果が、私にとって非常に心強い道標でありました。今回の受賞は、そのような私の研究姿勢をご評価頂いたものと思っておりますし、本受賞から研究を継続していくための大きな後押しを頂きました。誠に微力ですが、中国を含めた途上国の開発研究に一層精進していく所存です。

#### 受賞作

# 『アメリカ政治とシンクタンク

一政治運動としての政策研究機関』

みやた ともゆき **宮田 智之** 

(帝京大学法学部講師)

このたびは、大変名誉ある大平正芳記念賞を賜り、誠に光 栄に存じます。財団関係者の皆様、運営・選定委員の先生方、 本書執筆にあたり数々のご指導を下さった方々、出版にあた りご支援を下さった方々に、心より御礼を申し上げます。

本書『アメリカ政治とシンクタンク - 政治運動としての政策研究機関』の最大の目的は、アメリカ政治においてシンクタンクがどのような影響力を有しているかを具体的に明らかにすることでありました。一般的に、アメリカのシンクタ

ンクについては多大な影響力を有していると言われますが、 その学術的解明を試みた研究は、実は本場アメリカにおいて も極めて限られています。シンクタンクのような対象の場合、 その影響力を客観的に実証することは困難ではないかといっ た方法論上の問題が強く意識され、政治学者らの間でこの分 野の研究は活発に行われていません。

とはいえ、アメリカ政治における存在感の大きさを考えれば、シンクタンク研究は決して無意味ではなく、むしろその必要性はますます高まっていると言えます。そこで、本書では、より柔軟なアプローチを採用し、政策案の展開と保守系シンクタンクの関係に着目することで、「政策立案への関与を通じた短期的影響力」、「課題設定への関与を通じた中期的影響力」、「人材面での関与を通じた長期的影響力」という、三つの影響力の形態を抽出しました。

無論、研究分野としては未発達であるため、影響力をめぐる 課題の他にも、アメリカのシンクタンク研究にはさまざまな 課題が残されています。一例を挙げますと、長年海外においてもアメリカのシンクタンクは関心を集める対象であります が、諸外国とアメリカのシンクタンクの歴史的関係は全くと 言ってよいほど明らかにされておりません。このたびの受賞 を大きな励みとして、今後は、本書での研究をさらに発展させ るとともに、以上のような新たな課題に積極的に取り組んで 参る所存です。

#### 受賞作

『華人のインドネシア現代史

一はるかな国民統合への道』

さだよし やすし

(神戸大学大学院国際文化学研究科教授)

このたびは大平正芳記念賞を賜り大変光栄です。一昨年受賞された岡本正明さんも触れておられた通り、京都大学での

同門の師である亡き土屋健治先生が本賞の第一回受賞者のお一人でした。かつて恩師が受賞したこの賞を33年後まさか自分が頂けることになるとは、その巡り合わせに感慨を覚えると同時に、賞の重さに身の引き締まる思いです。

今回の受賞作である拙著『華人のインドネシア現代史』を 貫く主題は、サブ・タイトル「はるかな国民統合への道」にも 表れている通り、歴史も文化も多様なインドネシアの人々、 特に外国にルーツをもつ住民の代表格である中国系住民(華 人)を、同国の歴代政権や社会の指導者たちが一つの国家・ 社会にどうまとめあげようとしてきたのか、華人たち自身の 言動はどうだったのか、国民統合の過程をそれに伴う困難も ろとも、前史をなすオランダ植民地期以来約百年にわたって 辿ってみようということでした。

国民統合という主題が、東南アジア研究の世界ではやや時代遅れの、20世紀のテーマだとみなされていることは承知していました。特に華人研究においては、多元的アイデンティティ論やディアスポラ論、トランス・ナショナリズム論などの方が今では流行りの議論です。私は現代世界の動向にかんがみて、それらの意義を否定するものではありませんが、本書においてはそれらの論を華人に託して展開することは行ないませんでした。それらの議論の前提として、また華人社会にも東南アジア諸国にとっても今なお基盤となる最重要の課題として、国民統合の要請が底流にあることを序論で示し、あとはその主題に沿って百年の間何がどのように展開してきたのか、堅実な実証に徹することを心がけました。

全体を貫く結論として、華人のナショナル・アイデンティティのみならず、華人問題への取り組みを契機に、インドネシアの国民統合思想の基本原理自体が「血統主義」から「属地主義」(生まれ育った場所に属するという考え方)に移行したことを論証するなど、大小の新発見も多く盛り込んだと多少自負するものです。が反面、本書は一見、華々しさとは程遠い、われながら愚直なまでに地味な学術書となりました。そのような拙著を高く評価してくださった貴財団の皆さま、と

りわけ選定委員の皆さまに深く感謝すると共に、外見の華麗 さより中身の確かさを重視する本賞を受賞できたことを改 めて誇りに思います。

本日は誠にありがとうございました。栄えある大平正芳 記念賞の名に恥じぬよう、今後いっそうの高みを目指して精 進することを誓い、受賞の言葉とさせて頂きます。

#### 受當作

# 『絨毯が結ぶ世界―京都祇園祭インド絨毯への道』

かまだ ゆみこ 曲美子

(慶應義塾大学経済学部准教授)

このたびは大平正芳記念賞を賜り、大変光栄に存じます。 私は、イスラーム美術のなかでも、おもに写本研究と絨毯研究を行ってきました。日本では、絨毯研究の存在や意義がほとんど認知されていませんが、そうしたなかで拙著『絨毯が結ぶ世界—京都祇園祭インド絨毯への道』に意義を認めてくださり、大変励まされる思いです。運営・選定委員の諸先生方、財団関係者の皆様、名古屋大学出版会の皆様、これまでお世話になった先生方ならびに関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

拙著では、これまであまり研究されてこなかった、17-18世紀に南インド(デカン)で貿易品として織られた絨毯に焦点を当て、その特徴を明確にしたうえで、それらがオランダ東インド会社によって、江戸時代の日本を含む世界各地に運ばれるなかで、その機能や重要性を変えながら各地で独自に使用されていく様子を明らかにしました。研究の過程で、京都祇園祭に伝わるデカン産絨毯と関連するものが、ヨーロッパ各地や、アメリカ、インドに想像以上に多く残るだけでなく、日本にも少なからぬ枚数の絨毯が運び込まれ、使用されてきたことが分かりました。

日本では、絨毯研究の著作が僅かであり、あまり認知され

ていないことに鑑み、拙著では、絨毯研究がどのようなものなのかを紹介することから始め、14世紀以降にヨーロッパの人びとがイスラーム圏で織られた絨毯に魅了されていった様子や、16世紀以降の国際貿易によって絨毯が世界各地に運ばれていく様子についても詳述しました。188点のカラー図版と167点のモノクロ挿図によって、人びとの生活に根ざした歴史が見えてくるのではないかと思います。

今後も、イスラーム美術の研究者として、新知見を通じて 学界に貢献すると同時に、その成果を分かりやすく著作にま とめることで、多くの方にイスラーム圏の文化や歴史を身近 に感じてもらうことに自分を役立てていきたいと思います。

#### 受賞作

[CENTRAL BANKING AS STATE BUILDING: Policymakers and Their Nationalism in the Philippines, 1933-1964]

たかぎ ゆうすけ

(政策研究大学院大学助教授)

この度は、伝統ある大平正芳記念賞をいただき、大変ありがたく、また身の引き締まる思いでおります。

本書では、フィリピン中央銀行の設立過程と初期の経済運営をめぐる政治過程を分析しました。本書が取り上げた1960年代まで、フィリピンは、アジアの中でも比較的順調な経済実績を誇り、政治的にも二大政党システムが機能していました。その後、1980年代に入ると、国内外の情勢変化もあり、経済危機と政治危機の時代を迎えます。1990年代初頭、近隣諸国が「東アジアの奇跡」を謳歌した一方、フィリピンは「アジアの病人」と呼ばれました。先行研究では、こうした病人としての側面を理解することに力を注いでいました。もしフィリピンが常に病人だというなら、1960年代以前の実績はどうやって理解できるのだろうか、というのが当初の問題

関心でした。

ちょうどこの時期が研究上の空白地帯だったこともあり、いささか性急に研究対象を選んでしまったような気もします。そうした時、指導教授の山本信人先生から、「そもそもなぜ空白地帯が生まれているのか」を考えるようにご指導いただきました。そうすることで、物事を見る目としての分析視角の重要性に気づかされました。本書では、これまでの研究で支配的であった「弱い国家」という見方を批判し、社会経済構造の変容につながるような政治家、官僚や実務家のネットワークの存在を明らかにしました。

一部の実務家は、「アジアの病人」という批判を悔しい思いで受け止めたと思います。その頃から積み上げてきた改革の成果もあり、2010年代に入ると、フィリピンは新興国の一角を占めるようになりました。最近の研究では、こうした実務家について、連合(coalition)というキーワードを使って分析を進めています。大統領の派手な言動が耳目を集めがちなフィリピンについて、もう少し踏み込んだ理解が広まるよう、微力ながら貢献できればと思っております。これからもどうぞよろしくお願いします。

# ●贈呈式及び記念パーティーより (如水会館・2階大ホール)



第34回「大平正芳記念賞」授賞者の皆様



山口睦子様、ミレイヤ・ソリス様とお嬢様、道傳愛子様―左より



在りし日の大平総理、第34回「大平正芳記念賞」授賞作品展示



大平吉子様、中村正英様・奥様、大平明様一左より



石橋宗明様、鈴木崇様、齊田博一様―左より



佐渡ケ嶽親方・ご家族、大平知範理事長、溝口二郎様



小野寺正道様、堤恒一郎様、鈴木崇様、早乙女立雄様ご夫妻―左より



齊田晴一様ご夫妻、岩成真一様―左より



深田洋様、渡辺利夫様、阿部穆様一左より



貞好康志様ご夫妻、遠藤真広様、関宏子様―左より



末廣昭様、黒崎卓様、鎌田由美子様、橘宗吾様、高木佑輔様、乙部延剛様―左より



久保文明様を挟み宮田智之様ご夫妻



孫暁英様、ミレイヤ・ソリス様、段景子様、道傳愛子様―左より



吉村元久様、澤博史様、坂川嘉治様、小野寺正道様一左より



阿部穆様、鈴木崇様、大平裕様を囲んで海野家の皆様

# 風信・来信

# ●呉修竹著、何義麟編『在日台湾人の戦後史-呉修竹回想録』 彩流社、2018年9月

戦後、在日華僑は日本、中国、台湾の揺れる国際関係のなかで、 板挟みの困難な立場に立たされてきた。大陸、台湾の出身を問わず、北京か台湾かのいずれかの支持を求められる状態は、イデオロギーだけでなく、様々なファクターで華僑社会の"分断"を働きかけた。それにも拘わらず、未来への可能性を求めて活動し、そして、ナショナル・アイデンティティを求めた在日台湾人にとって、国民党も中国共産党も"儚い夢"と化してしまった……。 戦後の日・中・台の歴史的関係を映す貴重な手がかり。(何義麟・国立台北教育大学台湾文化研究所教授、第20回大平正芳記念賞受賞者)

#### ●磯部靖:慶應義塾派遣留学でUCLAにて客員研究員

昨年9月から、UCLAにて客員研究員をしております。当地では、第25回大平正芳記念賞受賞作であります『現代中国の中央・地方関係』にて扱った時期以降の中央・地方関係の展開を事例として研究を進め、帰国後、単著として出版したいと考えております。また、当地の中国研究誌の共同編集者として携わっている中央・地方関係についての論考が近々出版される予定でございます。(磯部靖・慶應義塾大学法学部准教授、第25回大平正芳記念賞受賞者)

### ●伊藤亜聖:アジア経済の教科書を編集

昨年度は一年間中国の深圳市に滞在していました。そこで目にしたのは「社会主義」を標榜する中国から世界市場で戦うベンチャー企業が群生している事実でした。ベンチャー企業の成長自体は中国特有の現象ではなく、ひょっとするとグローバル経済全般、そしてアジア全般にも通じる現象かもしれません。変化するアジアを捉えようとする試みとして、昨年度はアジア経済の教科書を1冊編集しました(『現代アジア経済論 「アジアの世紀」を学ぶ』有斐閣、2018年3月)。越境し、躍動し、革新し、岐路に立つアジアの断面を切り取ろうとしました。手に取っていただければ幸いです。(伊藤亜聖・東京大学社会科学研究所准教授、第33回大平正芳記念賞受賞者)

### ●川島真『中国のフロンティアー揺れ動く 境界から考える | 岩波書店、2017年

中国の対外政策を見るときには言葉と実際の双方を見るべきだという話がある。本書は世界に広がる中国の境界線=フロンティアに足を運んでおこなった調査に基づいた著作である。ザンビア、マラウイ、中国一東南アジア諸国との国境、金門島など、中国の外と内の境



界線を取り上げる。昨今は、一帯一路構想などが話題になるが、中国の宣伝でも先進国による批判でもなく、「現地」の視点から見ることで中国が各地で見せる多様な姿の一端を捉えることができるだろう。(川島真・東京大学教授、大平正芳記念賞選定委員)

# ●東京財団政策研究所監修、久保文明・阿川尚之・梅川健編『アメリカ大統領の権限とその限界 - トランプ大統領はどこまでできるか』日本評論社、2018年

アメリカ大統領の権限については誤解されている部分が大きい。同時に、その在り方そのものが近年大きく変わりつつあることも否定



しがたい。本書は、主としてオバマ、トランプ2人の大統領を念頭におきつつ、一方でアメリカ大統領に対する制度的拘束を基礎から説明しつつ、他方でこれらの制約を乗り越えようとする最近の大統領の試みについて、大統領令のあり方、中国に対する経済制裁、パリ協定離脱などの事例を取り上げながら、掘り下げて分析している。(久保文明・東京大学教授、大平正芳記念賞選定委員)

# ●アマルティア・セン著、黒崎卓・山崎幸 治訳『貧困と飢饉』岩波現代文庫学術366、 岩波書店、2017年

ノーベル経済学賞受賞のセンによる古典的 著作が、最新の研究動向を入れた訳者解説と 新しい訳文とともに文庫化されました。20世 紀に世界各地で発生した大飢饉の原因を、食



料を手に入れる人々の能力と資格に求めた画期的な書で、21世紀の現代にも多くの含意を持っています。(黒崎卓・一橋大学教授、大平正芳記念賞選定委員)



# ●外山文子・日下渉・伊賀司・見市建(編著)『21世紀東南アジアの強権政治— 「ストロングマン」時代の到来』明石書店、2018年

東南アジアでは、民主化の波に抗うかのよう に強権的な指導者が台頭してきた。なぜ彼ら は民衆に支持されるのか、あるいは民衆の支持

を失っても権力を握り続けることができるのかについて、タイの タクシン、フィリピンのドゥテルテ、マレーシアのナジブ、インドネシアのジョコウィを事例に論じた。(日下渉・名古屋大学大学 院国際開発研究科准教授、第30回大平正芳記念賞受賞者)



# ●大平裕著『卑弥呼以前の倭国五〇〇年』 PHP 研究所、2018年

最新の年代測定で、日本の弥生時代は定説より約500年遡ることが明らかとなり、日本人が悠久の昔と思っていた殷(BC1400~BC1027) 末期や周(BC1027~BC771) において、すでに日本と大陸王朝とのあいだに交流がもたれていたことが判明した。卑弥呼が登場する以前

500年間の、こうした大陸と日本との交流の足跡を、銅鐸、明刀銭 (燕の通貨)、多鈕鏡をはじめとする出土品と遺跡群、『山海経』等 の古代文献を通じて辿りなおす意欲作。

### ●石破茂衆議院議員が大平総理のお墓参りと記念館見学

さる7月13日、石破茂議員と平将明議員(当財団理事)が観音寺市の大平総理のお墓参りをされました。その後、記念館を来館、大平知範理事長と記念館運営委員の説明のもと熱心に見学されました。



▶大平知範理事長の案内で記 念館を見学する石破茂議員



# ●オンライン版『大平正芳関係文書』 丸善雄松 堂株式会社2018年7月

大平正芳が残した自筆の日記・手帳から、書簡、外 務省や通産省などの官庁資料、国会答弁・演説用の 原稿、選挙関係資料、回想録執筆のための重要人物 へのインタビュー記録など、膨大かつ多様な原資料



で構成された戦後政治史の一級資料群。完全買切型¥400,000(税別)。

#### ●『硯滴考』発刊

大平正芳が生前に発行して好評を博した『硯滴』。 判型も装丁も同じに、その名を『硯滴考』として、第一巻を6月12日に配布いたしました。大好評で、これからも大平正芳のこれと思える原稿を中心に、年に二・三冊発行することにしました。大平思想の一端に触れ



て頂き、現下の日本とその将来を見据える糧にして頂ければ幸甚です。

#### ●大平正芳新記念館運営委員会開催される

2017年11月5日、第1回の大平正芳新記念館運営委員会が開催されました。白川晴司・観音寺市長、河田正幸行・観音寺観光開発(株)社長はじめ観音寺市、三豊市の有識者の方々と財団関係者が出席し、全国区の記念館として、一層充実・発展させるために意見を交換しました。

#### ●財団役員の就任・訃報

2018年6月12日 髙橋厚男氏、平将明氏、吉村元久氏が理事に新任されました。

2017年8月21日 理事・小川是氏が逝去されました。

2017年10月8日 評議員・白西紳一郎氏が逝去されました。

2018年4月2日 評議員・長岡實氏が逝去されました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

#### ●大平正芳記念財団へのご寄付者名

【300万円】匿名、【200万円】三木証券(株)(鈴木崇)様、【100万円】(株)桃李(齊田晴一)様、【50万円】讃岐罐詰(株)(大西征四郎)様、(株)タカ・コーポレーション(馬渕喬)様、鈴木岩男様、【20万円】遠藤治憲様、【10万円】かんべ土地建物(株)(神戸雄一郎)様、(株)パリス(齊田博一)様、磯林雄様、森田久様、渡辺弘様、この他118名の個人・団体の方々より御芳志をいただきました。(順不同、平成29年9月~平成30年8月)

Printed in Japan 2018 ©



「大平正芳記念財団レポート」第 36 号発行・公益財団法人大平正芳記念財団発行人・大平 知範

2018 (平成 30) 年 9 月発行 〒 102-0082 東京都千代田区一番町 22 - 4 一番町館 1F 電話 (03) 3230 - 2213 FAX. (03) 3230 - 2214 URL: http://www.ohira.org/

#### THE MASAYOSHI OHIRA MEMORIAL FOUNDATION

Ichibancho-Kan 1F 22-4, Ichibancho, Chiyoda-Ku, Tokyo, 102-0082 JAPAN Tel. +81(Japan)3-3230-2213 Fax. +81(Japan)3-3230-2214

URL:http://www.ohira.org/